

# ヤンバルイメーヅについての心理学的研究

## ー地域リーダーを対象としてー

金城 亮・東江 平之

### 背景と目的

沖縄県北部の「ヤンバル」と呼ばれる地域は、恵まれた自然景観、独特の文化など豊富な観光資源を提供し、魅力的な観光リゾート地として脚光を浴びている。

その一方で、ヤンバルは広大な軍事基地を抱え、本島中部の普天間基地返還に伴う代替ヘリポート基地の建設問題では、受け入れの是非を巡り全国的な注目を浴びるなど、両面性を抱えている。近年では、土地開発事業に伴う森林伐採などによって赤土流出が顕著であり、河川・海浜の汚濁が進行しつつあり、数種の天然記念物を含むヤンバル固有の希少な動植物も、絶滅が危惧されている。

そこで本研究は、ヤンバル地域在住者とその他の地域の居住者が、ヤンバルの現状と将来像をどのように捉えているのかを多面的に調査することで、人々がヤンバルについて形成しているイメージを心理学的観点から明らかにすることを目的に企画された。

平成8年度には、沖縄県内の3つの4年制大学（沖縄国際大学、琉球大学、名桜大学）に通う大学生を対象に、ヤンバルとそこに住む人々についてどのようなイメージを抱いているか、またヤンバルを取り巻く状況とその将来をどのように認識しているかなどを問う調査票を作成し、第1次調査として実施した。

調査の結果については「平成8年度ヤンバル・イメージ調査報告書」としてまとめられているが、大学生は、ヤンバル地域を美しく、広く、自然が豊かで優しい地域として捉えている反面、変化の乏しさ、買い物や交通の不便さなどを強調する傾向が見られた。また、

50年後のヤンバルの姿については「都市化している」と予測する学生が多い一方で、ヤンバルの将来については自然環境の保全を第一義に考えていることも明らかになった。さらに、大学生の認知地図においては、恩納村や金武町、場合によっては名護市もヤンバル地域圏から除外する者が認められ、ヤンバル地域圏の過小評価傾向が指摘された。

ヤンバルイメーヅに関する第2次調査となる本研究では、平成8年度の調査結果を踏まえ、調査対象をヤンバル地域に居住する社会人とすることで、大学生におけるヤンバルイメーヅとの比較を行うことを主目的とする。特に本研究では、市町村4役や議会議員、区長など、ヤンバル地域において地域リーダーの役割を担う人々を対象として調査を実施する。これらの人々を調査対象とするのは、自らの居住地域の現状に関する精緻で多様な印象を形成していると考えられ、また当該地域の将来あるべき姿についてもより具体的なイメージを持っていることが期待されるためである。

なお、山原（ヤンバル）とは古来からの呼称であるが、その地域圏の定義については曖昧な部分も多く、『沖縄県国頭郡志』（国頭郡教育会編、1919）によれば、「島尻を下方（シモカタ）、中頭を田舎（イナカ）と呼ぶのに対して国頭を山原（ヤンバル）といふ。蓋し山林原野に富み村落相隔たるに出づ。」とあり、また沖縄本島において「我が国頭郡は其北半を占め、・・・（中略）・・・名護、恩納、金武、久志、国頭、大宜味、羽地、今帰仁、本部、伊江の十ヶ村を管区とす。」とある。これらの定義では、伊是名・伊平屋などの島々

はヤンバルに含まれないことになるが、本研究では、現在の行政区分上の北部広域市町村圏、すなわち伊是名村、伊平屋村を含む12市町村をヤンバルと定義し、調査の対象地域とした。

## 方 法

### 1. 調査対象

北部12市町村における地域リーダーとして、市町村4役・議会議員・区長計378名に調査を依頼し、167件を回収した。回収率は44.2%であった。

また、一部の調査項目については、比較のために、昨年度、県内の大学生297名を対象として実施された調査のデータを用いた。

### 2. 調査時期

1997年7月～11月。

### 3. 調査実施手続き

北部広域市町村圏事務組合の協力により、伊平屋村を除く北部12市町村の区長へは、郵送法によって調査を実施した。また、北部12市町村4役および議会議員に対する調査は、市町村役場と議会事務局へ調査票を預け、後日回収した。なお、伊平屋島については、ゼミ学生の調査実習を兼ねて役場、議会および区長宅を訪問して協力を求め、調査票は記入後に郵送してもらった。

## 結果と考察

### 1. 調査対象者の属性

第2次調査では、調査対象をヤンバル地域に居住する地域リーダーに限定したが、回答者の構成を居住地別でみると（図1-1）、名護市が35名（21.0%）で最も多く、次いで本部町25名（15.0%）、今帰仁村17名（10.2%）、金武町16名（9.6%）と続いている。一方、比較資料である大学生の居住地は県北部38.5%、中部

41.0%、南部20.5%となっており沖縄本島各地に分散している。また、性別構成では、学生の半数は女性であるのに対して、地域リーダーでは男性が圧倒的に多く（92.2%）、これは議会議員や区長などの大半が男性で占められていることによる。

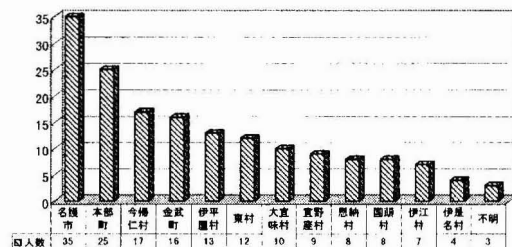


図1-1 地域リーダーの居住地 (n=167)

年齢別構成をみると、地域リーダーは40歳以上がほとんど（98.8%）である。調査結果の分析に際しては、これらの制約に配慮する必要がある。すなわち、調査データには、ヤンバル地域に居住する大学生以外の若年者層や女性の意見は十分に反映されていないことに注意しなければならない。この限界を踏まえて、以下の調査結果をみていこう。

### 2. ヤンバルを象徴するもの—地域リーダーと学生の回答比較

ヤンバルを象徴する生き物について提示した選択肢から1つを選択させた結果、図2-1に示すように、地域リーダー、学生ともヤンバルクイナが最上位にきている（地域リーダー：53.9%、学生：72.6%）。学生では次いでノグチゲラ（13.4%）が多く、地域リーダーではハブ（17%）、ノグチゲラ（14.5%）、イノシシ（12.1%）の順になっている。双方の大きな違いとして、学生のあげた象徴的生物には天然記念物であるヤンバルクイナやノグチゲラなど、ヤンバルに居住している者でも滅多に出会うことのない希少生物があげられているが、地域リーダーの回答では、それらに加えてより生活に密着した、ハブやイノシシなどがあげ

られている。

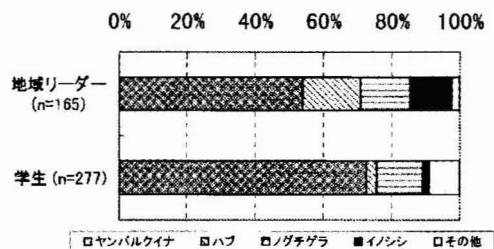


図2-1 ヤンバルを象徴する生き物

ヤンバルを象徴する色としては、「緑」をあげる者が地域リーダーで89.0%、学生で73.4%と圧倒的に多い(図2-2)。次いで「青」が両群とも多くなっている(地域リーダー:8.5%、学生:7.6%)。地域リーダーのイメージにない「ピンク」が学生で第3位となっているが、これは後述の象徴的な山についての回答結果と考え合わせると、桜花の色であると考えられる。総じて、山の緑色、海の青色はヤンバルの豊かな自然を象徴しているようである。

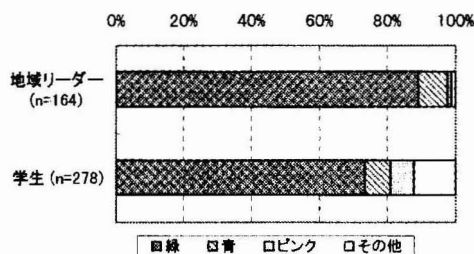


図2-2 ヤンバルを象徴する色

ヤンバルを象徴する山について、学生の選択では、八重岳、名護岳が合わせて51.5%を占める(図2-3)。その理由として学生にとってヤンバルは桜祭りなどで訪れる観光地としての印象が強く、桜の名所である八重岳や名護岳がヤンバルの象徴として真っ先に浮かぶようだ。一方、地域リーダーの選択では、結果的に標高の高い3山に票が分かれている。

以上のように、ヤンバルイメージの基礎となる象徴的事物に関する認識を見る限り、学

生の印象は経験に根ざした知識というより、観光パンフレットなどにみる画一的なイメージが強い。逆に、地域リーダーのあげる象徴的事物は生活に根ざし、現実的で多様性に富んでいることが特徴といえる。

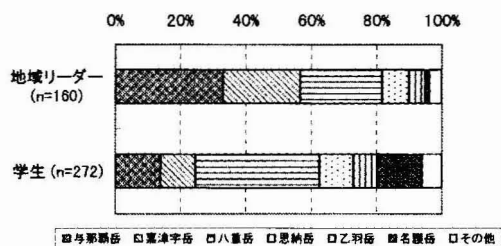


図2-3 ヤンバルを象徴する山

### 3. ヤンバルはどこからどこまでか

ヤンバルはいくつの市町村から成るかという質問を行ったところ、12市町村と答えた者が72%、また9市町村と答えた者が22%であった。9市町村という回答も旧来の区分に従えば、あながち誤りとはいえないためこれも合計すると、ほぼ94.6%が適正な回答を示している。ところが実際に白地図上でヤンバルの地域圏だと思ふところに斜線を引かせたところ、地域圏を適切に区分した回答は53%しか得られなかった(うち12市町村正答36.1%、9市町村正答15.8%)。実に41%の地域リーダーがヤンバルの地域圏を過小評価しており(離島を含めない9市町村の場合は適正回答に区分している)、特に金武町、恩納村を含まない例が多く、名護以北の3村をヤンバルと回答した例もあった。学生の認知地図にも同様の傾向が認められた。また、どのような場合でも白地図上のヤンバル地域圏から国頭村、大宜味村、東村が除かれることはなく、認知地図上ではヤンバルの南限が北上していく傾向が認められた。

### 4. S D (Semantic Differential)法による「人柄」および「地域」イメージ

<SD法とは>

刺激対象(概念)の情緒的意味を測定する

ために考案された、両端をなす50の形容詞対で構成されている尺度である。通常、評価、力量性、活動性の3次元が抽出されている。

本調査では、その変形で、対象とする概念をヤンバル地域、そして、ヤンバルに住んでいる人々とし、「広いー狭い」「親しみやすいー親しみにくい」など15個の形容詞対を尺度として用いた。本調査では「人柄」と「地域」を同じ概念次元で捉えることの効用を考慮し、両概念の評定に同一の形容詞対のセットを用いた。さらに、比較のために本島中部・南部の地域及び人々についても同様に評定してもらった。なお、評定項目のセットは平成8年度の学生調査のものとは異なるため、本報告では地域リーダーの評定結果のみを検討し、学生の回答との比較は行っていない。

#### ①ヤンバル居住者の「人柄」イメージ

ヤンバルに住む「人」についての評定結果を因子分析（主因子法、バリマックス回転）した結果、固有値の減衰傾向と累積寄与率（34.2%）を勘案して3因子解を得た。抽出された3因子は、それぞれ＜親和性＞因子、＜開放性＞因子、＜素朴さ＞因子と呼べるような項目群で構成されている。

親和性因子については、負荷量の高い順に「美しいー醜い」「たくましいー弱々しい」「明るいー暗い」「良いー悪い」などの7項目から構成されている。図4-1に示したように、ヤンバルの地域リーダーから見たヤンバルに住む「人」は、中・南部居住者に比べてより「美しく」「たくましく」「明るい」「良い」と評価されており、前向きな人柄でポジティブなイメージが強い。一方「動的なー静的な」では、相対的に物静かで控えめなイメージも持たれている。開放性因子は、「新しいー古い」「親しみやすいー親しみにくい」「広いー狭い」など6項目から構成されているが、ヤンバル居住者は比較的「古い」、「親しみやすい」、「広い」などとみなされており、おおらかで親し

みやすい人物像がうかがえる。素朴さ因子は「複雑なー単純な」、「はりつめたーのんびりした」の2項目からなり、ヤンバル居住者は中・南部に比べて単純でのんびりした人柄が強調されている。

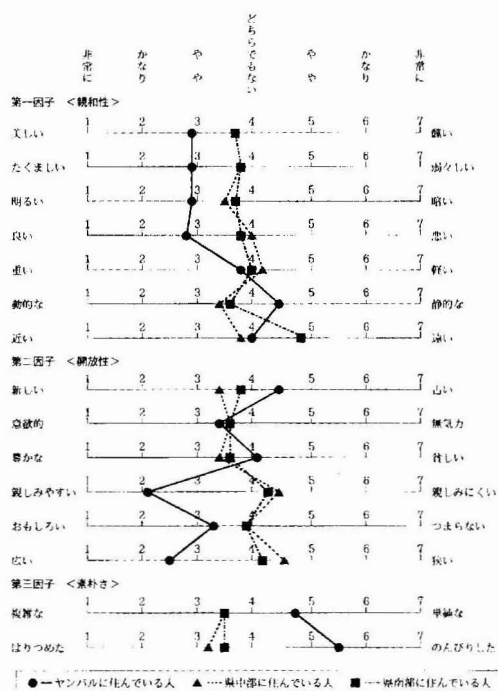


図4-1 地域リーダー評定による人柄イメージの比較

これらのことから、ヤンバルの地域リーダーからみたヤンバルに住む人のイメージは、他地域に住む人の印象と比べて好ましい、親しみやすいものとなっており、素朴な印象を付与されている。一方、中部と南部の居住者に関するイメージでは、「近いー遠い」の項目以外、評定値に差があまり認められず、ともに平均が中位点の4点付近に分布している。同様の傾向は後述の「地域」イメージにも認められる。ヤンバルの地域リーダーにとって、自らを含むヤンバル居住者やヤンバル地域そのものの印象に比べて、中・南部地域の人々やその風土の持つ特徴についての印象は曖昧であるといえる。

## ②ヤンバルの「地域」イメージ

ヤンバルという地域についての評定結果も同様に因子分析した結果、図4-2に示すような3因子解を得た(累積寄与率36.3%)。抽出された3因子のうち第1因子は、「人柄」イメージの第1因子を構成していた7項目から「近いー遠い」がはずれ、代わりに「親しみやすいー親しみにくい」「意欲的ー無気力」「おもしろいーつまらない」が加わった計10項目からなり、＜魅力＞因子と命名した。第2因子は、「人柄」イメージの第3因子と同様の2項目で構成されており、先の分析と同様＜素朴さ＞因子と呼ぶことにする。さらに、第3因子には「人」イメージにあった＜開放性＞因子の代わりに、＜近代性＞因子と呼べる項目群が見られた。＜近代性＞因子は「新しいー古い」「豊かなー貧しい」「近いー遠い」の3項目で構成されている。魅力因子に見られるヤンバル地域のイメージの特徴としては「美しい」「良い」「親しみやすい」「広い」などの評価が目立っている。素朴さ因子では「単純な」「のんびりした」とみなされ中・南部に比べ素朴なイメージが強い。近代性因子では、ヤンバル地域は中・南部地域に比べて「古い」「貧しい」と評価されており、昔と変わらない風景や社会の在りようがうかがえる。これらのことからヤンバルの地域リーダーが形成している地域イメージでは、中・南部に比べてヤンバル地域は魅力的な場所であるが、同時に近代化から取り残された素朴な地域であるとの印象も示されている。

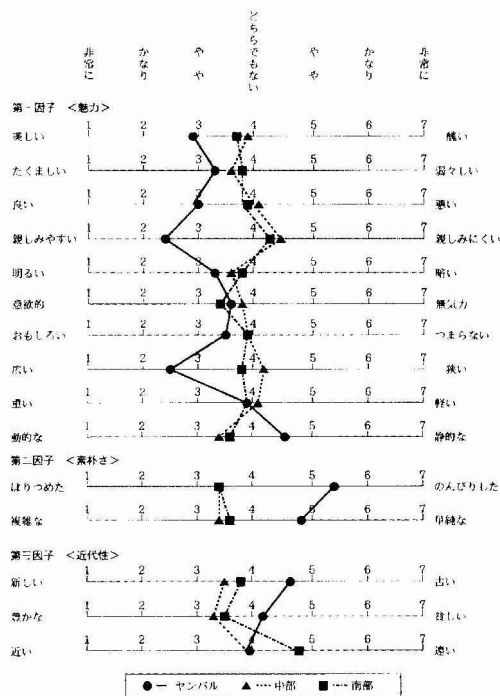


図4-2 地域リーダー評定による地域イメージの比較

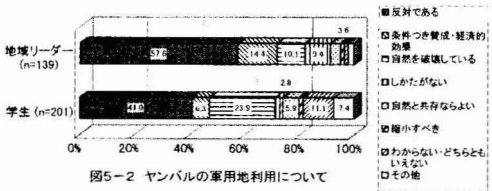
## 5. ヤンバルへの関心・将来予測

ここでは、地域リーダーと学生のヤンバルを取り巻く問題への関心とヤンバルの将来像予測について検討する。ヤンバルへの関心については「自然保護」「軍用地利用」「観光事業」といった問題について自由記述による回答を収集した。さらに「人口変化」「50年後のヤンバル」「地域作り」の観点からヤンバルの将来像予測をしてもらった。

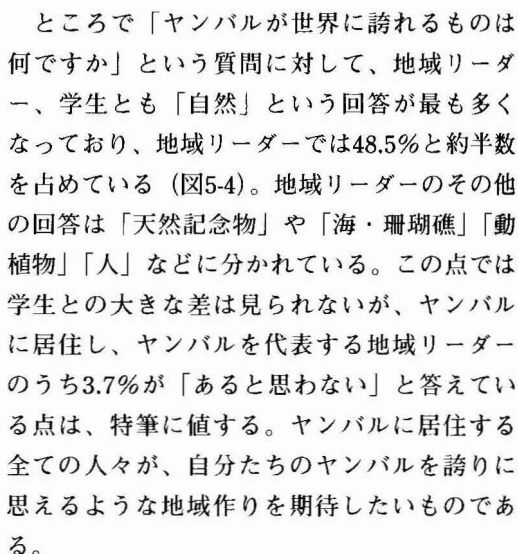
### ①ヤンバルを取り巻く問題

「ヤンバルの自然保護」について自由記述してもらったところ、図5-1に示すように自然保護を「強化すべき」「手を加えずに自然を残すべき」という意見が顕著で、両回答を合わせると地域リーダーでは39.3%、学生では実に77.7%に及ぶ。ヤンバルの自然をそのまま残しておきたい、という強い願いと、このままでは類稀な自然が失われてしまうという危機感も見取れる。また地域リーダーに特徴的

しかしながら、一方で「条件つき賛成」という意見が、地域リーダーでは14.4%にのぼっている。それは、地域の活性化や経済効果を求める人々にとって、基地をいわば、「必要悪」として容認せざるを得ない現実を反映していると考えられる。



その他、地域リーダーでは「観光施設の充実」(8.1%)、「自然をアピールした観光」(7.1%)、「交通の便の改善」(6.6%)、「保養地としての利用」(5.9%)などに意見が分かれており、観光地としての魅力はあるが、「具体的にはあげられない(漠然とした魅力)」という記述も11.0%を占めている。地域リーダーにとって、ヤンバルの観光事業のさらなる発展を望む声は大きいながらも、その方向性についてはコンセンサスを得られていないのが現状といえる。





待が反映されたものといえよう。

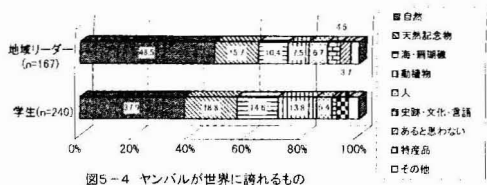


図5-4 ヤンバルが世界に誇れるもの

## ②ヤンバルの人口や、地域はどう変わるか。

次にこれからヤンバルがどのように変化していくのか、ヤンバルの将来について地域リーダーと学生の見方を比較してみよう。

沖縄県の人口は、約126万人（平成7年12月24日現在）であるが、このうちヤンバルの人口は117,941人で県全体の9.4%を占めているにすぎない。この数字をふまえ、「これから先ヤンバルの人口がどう変化すると思いますか」という問に対して、「増えると思う」と答えた者が地域リーダー（46.6%）、学生（45%）ともほぼ同率で最も多い。一方で、「減る」と答えた者も地域リーダーで23.3%、学生では34.7%に達しており、若い人ほど人口減少を予測する割合が高くなっている。今後、ヤンバルにおける雇用の機会や生活圏としての魅力が創出できなければ、若年者人口の流出をくい止められないことも危惧される（図5-5）。

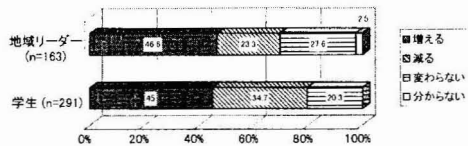


図5-5 ヤンバルの人口は今後増えるか

「50年後もヤンバルは、ヤンバルと呼ばれていると思いますか」という問については、学生では90.4%、地域リーダーでも92.1%が「はい」と答えており、多数を占めている（図5-6）。これは、沖縄の自然や風土を象徴するヤンバルという土地への親しみと未来への期

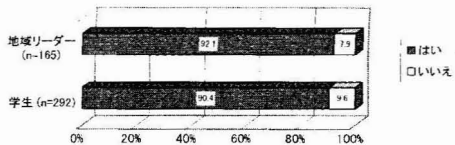


図5-6 50年後もヤンバルはヤンバルと呼ばれているか

次に「ヤンバルの地域作りに携わるとすれば、どのようなことに力を注ぎたいですか」との問に対し、地域リーダーでは43.1%、学生では51%とほぼ半数の人が「自然環境の保護につとめる」と答えており、環境保護を重視する回答が得られた（図5-7）。

次いで「国際交流のため活動する」が地域リーダーで17.5%、学生で13.4%、「ヤンバルの方言や風俗習慣について教育・研究する」という回答が、地域リーダーで13.8%、学生で10.3%となっている（図5-7）。ヤンバルという貴重な地域を、もっと世界中に知らしめたいという願いが感じられる。

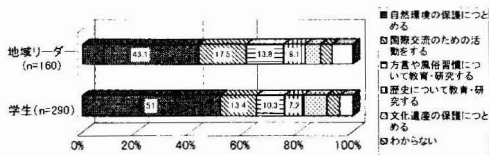


図5-7 ヤンバルの地域作りに携わるとすれば、  
どのようなことに力を注ぎたいか

最後に「これからのヤンバルについて、何を望むか」という問について図5-8に示すような選択肢をあげ、うち一つを選択させた。その結果、学生は圧倒的に「自然環境の保全」を望む者が多い(59.7%)。したがって、開発よりは現状維持、あるいは自然回帰を望む声が強いようである。

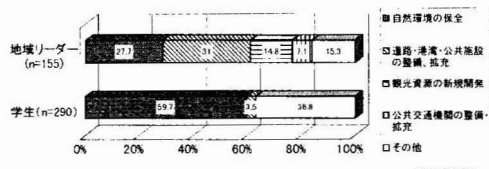


図5-8 ヤンバルの将来について何を望んでいるか

一方、地域リーダーは、「道路・港湾・公共施設の整備・拡充」を望む者が最も多く(31.0%)、次に自然環境の保全(27.7%)、観光資源の新規開発(14.8%)の順となっている。この点が学生との最も大きな違いであり、先の分析でも述べたように、地域リーダーには自然環境の保全を望む一方で、ヤンバルという地域で生活を続けていく上での利便性の追求や、観光資源の新規開発等による経済効果を望む声も強い。

総じて、自然・観光資源の保全と開発のバランスをどう保っていくかが、これからのヤンバルにとって大きな課題となっていくことは間違いないであろう。

## 引用文献

- 金城亮・東江平之 1997 ヤンバル(沖縄本島北部地域)イメージの研究Ⅱ ―地域リーダーを対象として― 九州心理学会 第58回大会発表論文集
- 国頭郡教育会 編 1919 沖縄県国頭郡志 沖縄出版会
- 湊和雄・横塚眞己人 1997 マルチメディア 沖縄亜熱帯図鑑 アスキー出版局
- 名桜大学産業社会心理学自主ゼミ 編 1998 平成9年度 ヤンバルイメージの研究Ⅱ 報告書(未公刊)

## 附 記

本報告は、名桜大学産業社会心理学ゼミナールの3年次演習課題として平成8～9年度に実施された一連の調査に基づいている。

(きんじょう あきら)

(あがりえ なりゆき)